

オープンウォーター・ダイブバディ コース 概略

参加必須条件及び認定条件

この特別な認定コースは、オープンウォータースキューバダイバー以上で、身体障害についてもっと深い知識と理解を求めるダイバーのために設定されたものである。このコースでは、障害とは何であるのか、またその障害がどのようにその人に作用するのか、そして幅広い種類にわたった障害のダイバーと共に旅行し、スキューバダイビングを行うに当たって安全で効果的な介助の方法を学ぶものである。認定の要件は以下の通りである。

- A. 国際的に認められた指導団体によって、オープンウォーターダイバーもしくはそれ以上に認定されていること。
- B. ダイブバディコース開催以前の2年間に最低36本のスキューバダイビングの経験を有していること。
- C. HSA実技認定基準のうち、以下の基準について合格していること。

. B. 19. 20. 21 / . C. 40. 41.
. B. 16. 17. 18 / . C. 31.

コンファインドウォーター：

- . B. 19. 疲労ダイバーの曳航。オーラルでバディのBCDに吸気し、常にアイコンタクトをとりながら曳航する。
- . B. 20. バディの器材、すなわちマスク、シュノーケル、ウエイトベルトをはずす。
- . B. 21. 意識不明ダイバーを蘇生させるシュミレーションを行う。
- . C. 40. 水面で全器材を装着した他のダイバーを最低50m曳航する。[B] [LS]
- . C. 41. レスキュー・シュミレーション：最低水深2.5mの海底にいる意識不明のダイバーのウエイトベルトをはずし、安全に水面に引き上げ、人工呼吸をしながら最低15m曳航する。[B] [LS]

オープンウォーター：

- . B. 16. 疲労ダイバーの曳航。オーラルでバディのBCDに吸気し、常にアイコンタクトをとりながら曳航する。
- . B. 17. バディの器材、すなわちマスク、シュノーケル、ウエイトベルトをはずす。
- . B. 18. 意識不明ダイバーを水面で蘇生させるシュミレーションができる。
- . C. 31. 水面で全器材を装着した他のダイバーを最低50m曳航する。

D.認定トレーニングについての要件：

HSAオープンウォーター・ダイブバディコース基準を受講し合格すること。

E.認定登録：

1. 67ページにあるダイブバディ用認定申請書にもれなく記入する。
2. 安全ダイビングのためのガイドラインを熟読し、理解したうえでサインし、3部のうち1部をインストラクターが保管し、1部はHSA本部に送付する。
3. 3cm×3cmの写真2枚を用意する。
4. 36本のダイビング経験を証明する。(ログブックのコピーなど)
5. 59ページからのコンファインド及びオープンウォータートレーニングを記録し、日付を記入し、サインして一部をインストラクターに渡す。

F.オープンウォーターダイブバディは毎年更新しなければならない。

更新にあたってはHSA日本支部に次の資料を送ること。

- 1) メンバーシップ更新申請書(68ページ)
- 2) 過去12ヵ月以内の12本のダイビング経験を証明する書類
- 3) メンバーシップ更新料 ¥8,000-(消費税別)

コース内容要約

レクチャーテーマ：

身体障害の種類：

あなたが一緒に潜ることになるダイバーの身体障害について、ダイブバディとしてあなたは良く理解しておくべきである。身体障害の解剖学的、生理学的な原因と身体障害の心理、またその障害とスキューバダイビングの関係などについてしっかり理解しておかなければならないのである。そうすれば、ダイブバディとしてより自信が持て、担当するダイバーにもより多くの自信と安心を与えるものである。

HSAの認定について：

オープンウォーターダイブバディとしてバディシステムを的確にかつ安全に実行するために、マルチレベル認定の体系、手順、認定要件に関する基本的な部分を理解することが必要である。

障害者に特徴的かつ特異な様々な問題について：

どういった問題がおこりうるか、またどう解決していくか。我々はダイブバディコースの実技トレーニングで、全ての『種類』の障害を経験できるものではない。従って、経験できなかった部分に関しては、プールでのセッション及び学科講習によってカバーしなくてはならない。

特別に配慮すべき点について：

障害者に対しては、様々な面で特別な配慮を必要とすることがある。インストラクターはこのことを十分に理解し、生徒にも徹底すべきである。ダイブテーブルの使用法などがその一例である。

移動に関する考察：

教室、プール、ビーチ、ボート、レストラン等、移動に関しては、健常者が見ただけでは計り知れない困難が障害者にはあるものである。

実技トレーニング：

- ・ シュミレーション：感受性が極めて重要である。ダイブバディーとして障害を持つということはどういうものであるのか、また様々な障害についてどういった介助が最も快適であるのか、といったことを常に考えながらシュミレーションとして経験してみる。
- ・ 対麻痺のシュミレーションではフィンをはずし、脚を縛ってなるべく腹筋、背筋、脚の筋肉を使わない様にして、下半身の機能麻痺を経験する。四肢麻痺のシュミレーションは首以下の機能麻痺を経験するものであり、ダイビング活動のほとんどの部分でバディーの介助を受けることによってシュミレーションする。
- ・ 全盲のシュミレーションでは、ブラインドマスク（ガラス面をテープングして見えなくしたもの）を装着し、触覚によるコミュニケーションのみに頼ったダイビングを行う。
- ・ コンファインドウォーター：ダイバー全員がつい麻痺、四肢麻痺、及び全盲のシュミレーションを経験し、それぞれの障害についての第1バディー及び第2バディーを交代でシュミレーションする。シュミレーションではバディプリージングやコントロールアセントなどの様々なスキューバスキルをトレーニングしながら行うこと。
- ・ オープンウォーター：ダイバー全員がつい麻痺、四肢麻痺、及び全盲のシュミレーションを経験し、それぞれの障害についての第1バディー及び第2バディーを交代でシュミレーションする。（コンファインドと同様である）。

シュミレーションでは器材装着や、エントリー、エキジットなど、そのポイントの条件に応じたテクニックを使ってバディチーム全体で行い、バディチームの全員にとって安全かつ、快適で楽しいダイビングをするように心がける。

復習、質疑応答、最終試験：